

## 審査の結果の要旨

氏名 深堀浩樹

本研究は、特別養護老人ホームに入居している要介護高齢者の家族を対象として、家族が行っている介護の実態を質的研究手法により明らかにすること、施設入居高齢者の介護を継続している家族介護者の「施設家族介護負担感尺度」を開発すること、および、施設家族介護負担感に関連する要因を検討することの3点を主要な目的としたものであり、下記の結果を得ている。

1. 入居者の家族介護者のうち入居後も頻繁に面会を続ける者は、面会の中で、《施設家族介護》を実施することで特別養護老人ホームにおいても介護を継続していたことが示された。
2. 家族介護者は、面会を通して入居者や施設職員と接する中で《施設家族介護の中での否定的認識》と《施設家族介護の中での肯定的認識》を経験していた。
3. 家族介護者の《施設家族介護》および《施設家族介護の中での否定的・肯定的認識》のあり方は《施設家族介護に影響する要因》の影響を受け、個々の家族介護者・入居者によって異なると考えられた。
4. Lazarus と Folkman のストレス認知理論を基盤として、施設家族介護負担感尺度項目案を作成し、東京都 A 区と三重県 B 市の特別養護老人ホーム 7 施設(東京都 3 施設、三重県 4 施設)に入居する高齢者の家族介護者 312 名を対象とした分析から、「職員との交流の負担」、「拘束感」、「入居者への負い目」、「入居者の衰弱への悲しみ」の 4 因子 16 項目からなる施設家族介護負担感尺度を開発した。
5. 統計学的分析の結果、本尺度には一定の妥当性・信頼性が認められ、本邦において使用可能な尺度であると考えられた。
6. 構造方程式モデリングを用いたパス解析により、施設家族介護負担感尺度の関連要因を探索し、家族介護者の年齢が若く ( $-0.21, p < 0.001$ )、家族からのソーシャルサポートを受けておらず ( $-0.20, p < 0.001$ )、在宅介護経験が多く ( $0.14, p < 0.01$ )、面会頻度が多い ( $0.21, p < 0.001$ ) ほど、かつ、入居者の認知症の症状が重く ( $0.13, p < 0.05$ )、施設からの距離が遠く ( $0.22, p < 0.001$ )、施設生活への満足度が低い ( $-0.36, p < 0.001$ ) ほど施設介護家族負担感が高いとの結果を得た。

以上、本研究は、特別養護老人ホーム入居者の家族介護者の経験の詳細を質的データを用いて学術的に示すとともに、施設家族介護負担感尺度を開発しその関連要因を明らかにした。本研究は、わが国において、「施設家族介護」という新たな概念を提示し、「施設家族介護」により生じる負担感の測定を可能にした点で、学位の授与に値すると考えられる。